

---

# 暖かな雪に.....。

ハンマーヘッド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

暖かな雪に……。

### 【Nコード】

N6536K

### 【作者名】

ハンマーヘッド

### 【あらすじ】

金剛石先生主催による「Plan April First」投稿作品です。テーマは「4月」ということで……4月と言えば桜。桜と言えば死体。死体と言えば幽霊！ と言うワケで、幽霊のボヤキです。

俺は幽霊である。専門用語で言うところの浮遊霊とか言うヤツだが、

間違っても悪霊ではない。いろいろなところをタンポポの綿毛のよう

ふわふわと浮遊している霊、ということで浮遊霊。生きている人間

にと  
って毒にもならないが、薬にもならない。有害でもないが、無害で  
もな

い。そんな中途半端な存在だ。

「よお、兄ちゃん！ 今日もいい天気だな！」

声をかけられて振り向くと、そこには誰かの家の塀から「横向き  
に」

生えているハゲ頭のオッサンがいた。

「よお、おっちゃん。今日もビミョーなところから生えてんな」

幽霊の特権と言うべきか、重力を無視したオッサンの姿勢に、俺  
はっ

い笑顔を浮かべながらそう返した。すると、オッサンはニタリと笑

って

見せる。

「そうそう！ 幽霊なんて楽しい生き物じゃねえんだからよ、自分で楽

しいこと見つけねえとボケちまうぜ？ 兄ちゃんも何か楽しいことしろ

や！」

「考えとくよ」

幽霊である時点で「生き物」でも何でもない気がしたが、そこは  
敢え

て肯定しておくことにする。

「じゃあな〜！」

特に用は無かったらしく、ヒマ潰して俺に声をかけて来たオッサ  
ンの

幽霊は横向きに壁から生えたまま、スライド式に移動してしまった。

「今日も元気だな」

どこからどう見ても激しく曇り空の朝、なぜかそこだけはキラリ  
と光

っているオツサンの後頭部を眺めながら、俺は小さく溜め息を零す。

「ん？」

ふと視線を感じて上を見ると、そこには死装束を着たおばあちゃんが

空中遊泳していた。おばあちゃんは俺に向かって軽く会釈すると、その

ままどこかへ飛んで行ってしまふ。

「いつも通りのお散歩コースだな」

決まった時間の決まった道筋。あのおばあちゃんとの付き合いは短い

が、毎日同じことをしていればさすがに俺にも分かる。名前も死因も知

らないおばあちゃんなのだが、お互いに顔見知りだ。毎朝この時間

空中を飛行しているおばあちゃんと会釈を交わすのは、俺にとっても習

慣となっていた。

「こ、これはボクの電信柱なんだー！！で、出て行けー！！」

目的地へ向かって足を進めていた俺の耳に、道端の電信柱の横で今日

も元気よく泣き叫んでいる声が聞こえてきた。そこにいるのは、ただ中

学生かそこらの幽霊だ。何があつたのか知らないが、あれくらいの年で

幽霊になってしまつとは、何とも不幸なことだ。だが、必死に電信柱に

しがみ付きながら叫んでいる姿を見ると、あまり可哀そうだとは思

えないから不思議だ。

「何を言つたよー!! これは私の電信柱よー!! あんたこそ出て行きな

さいー!!」

オバ 中学生に喧嘩を吹っ掛けているのは、死亡推定年齢40代ほどの

サンだ。どんな事情があるのか知らないが、互いに誰のものでもないは

ずの電信柱の所有権を巡って一步も譲らない。これまた、俺にとつ

ては

日常の光景である。

「大変だなあ、地縛霊じばくれいってヤツは」

電信柱を巡って喧嘩している少年とオバサンは、いわゆる地縛霊と言

うヤツだ。特定の場所に強い思い入れがあるため、死んでからもその場

所を離れられないとか何とか。そう言った幽霊たちのことを地縛霊と呼

ぶのだ……と、ハゲ頭のオッサンから前に聞いた。

「あの電信柱によほど思い入れがあるんだな」

場所 普通、思い入れがあるとすれば自宅とか、学校とか、そういった場所

が思い浮かぶのだが、どうやら彼らにとって生前、最も思い入れがある

場所とはこの電信柱だったらしい。そして、地縛霊が2人集まると、た

いてい喧嘩になる。あの中学生とオバサンが、その例だ。

「ふひよひよひよ、むひよひよ」

国道を通り過ぎて行く車のフロント・ガラスに、20代で死んだと思

われる女の霊が張り付いて、ドライバーを脅かしていた。だが、どうや

らそのドライバーには、世に言うところの靈感なるものが備わっていない

いらしく、女の霊が芸術的と呼べるほどに気持ち悪い顔をしているにも

関わらず、顔色ひとつ変えることなく信号を見つめていた。むしろ、怖

がっているのは俺たち幽霊の方で、生きている人間は全く怖がっていない

い。ターゲットを間違えたと思ったらしい女は、まるでカエルのよう

な見事なジャンプで、隣に並ぶ車のフロント・ガラスへと移動していつ

た。

「みんなヒマなんだな……」



大半の生きている人間は知らないことだろうが、街には幽霊が溢れて

いる。俺も、生きていた時にはこんなに幽霊がいるものだとは思っても

みなかった。だが、いざ死んで幽霊になってみると、それまで見えなか

ったものが見え始めた。同時に、生きている人間には見えない存在にな

ってしまった。まあ、仕方ないことだ。俺自身が幽霊なんだから。

「でも、もうちょっと幽霊らしい顔してるかと思ってたんだけどな」  
生きている時の俺が想像していた幽霊は、まさしくホラー映画の中に

出て来るような怖い顔をした幽霊ばかりだった。だが、実際の幽霊は違

った。何だかみんな、奇妙に明るい。もちろん、幽霊になって日が浅い

ヤツはそれなりに落ち込んだ顔をしている。だが、そのうち落ち込むの

を諦める。そして、何とかして楽しいことをしようといういろいろ画策し始

める。そんなものだ。

「女の子が寝てる部屋に忍び込んで、天井から逆さまに生えてみる  
こと

に魂かけてるオヤジとか。楽しそうに写真を撮ってる家族の傍に行  
って

手とか足だけ映って来るオバサンとか。不良少年を追いかけて回す元  
交

通機動隊の幽霊とか」

ツサ  
言い出せばキリがない。要するに、みんなヒマなのだ。ハゲたオ

ンが言っていた通り、俺たち幽霊には楽しみが無い。考えてること  
も、

見た目も、何もかも生きている時と全く同じ。たまに、死んだ時の  
グロ

い見た目のまま浮遊しているヤツもいるが、それはあくまで個人の  
趣味

である。人間と変わらないのに、生きていた時には普通にしていた  
こと

が、幽霊になったら何もできない。だから、幽霊にしかできない楽

しみ

を探し始める。

「食べるのが好きだったヤツは、幽霊になったら食べる必要が無いっ

て言うか、食べたくても食べねえし。マンガの続きが気になっても、

ちよつどいいタイミングでそれを読んでるヤツを見つけねえと読めねえ

し。テレビも自分でチャンネル変えられねえし。ゲームしたくてもコン

トローラーに触れねえし」

の幽 正直、幽霊はつまらない。幽霊になって2年とちよつと。俺は他

霊たちの気持ち少し分かるようになって来ていた。

「あゝあ、生き返りてえな」

言っても仕方ないことを、つついボヤいてみる。そもそも、当時ま

だ18歳だった俺が、なぜ幽霊になってしまったのかと言うと、それは

それは長い話になる。敢えて短く纏めてみると、夜中の9時に近所のコ

ンビニまで出向いた時、どこからともなくキキキーツとか言う音が聞

こえて来て、はあ？ と思った時にはドカーンとなって、気が付いたら

チーンだった。

「あれからもう2年か……」

正直な話、俺を殺したヤツが憎くないワケじゃない。それこそ、幽霊

になったばかりのころは、そいつのことばかり考えていた。同じ目に

遭わせてやるうかとさえ考えていたこともあった。でも、俺みたいな幽

霊がどんなに叫んでも、罵っても、犯人は生きてる人間だから俺の声な

んて聞こえない。言うだけ無駄ってヤツだ。恨み言も泣き言もさんざん

言って、正直なところ言い飽きた。それで、俺はそんなヤツの傍に

いる

より、幽霊にしかできないことを楽しもうと考えた。

「沖縄には、もう一回くらい行ってみてえな」

幽霊になって、いろいろな場所へ行つた。駅員に俺の姿は見えないか

ら、新幹線や飛行機に無賃乗車して北海道とか沖縄とか、行つてみたか

つたけど金の問題で行けなかった場所へ行つた。ついでに、18歳未満

は入場禁止とか書いてある場所に堂々と入ってみたし、映画もタダで観

せてもらった。そんな感じで、幽霊になった特権と、死んでしまつたつ

ていう空しさみたいな感情を誤魔化すのにも、1年かそこらで飽きた。

そして俺は、生きていた時から一番「大事」だったヤツの傍に、帰つて

来た。

「やっぱり幽霊ってヒマだよな、ホント」

朝の街は人で溢れている。スーツを着た会社員、OL、制服を着た学生、

私服姿の男女……。その中にはあからさまに幽霊だと思えないヤツ

も混じっているが、生きている人間の方が多い。色彩が溢れているよう

で、それでいて決まった色しかない人混みの中、俺は駅の改札の前に立

つ。いつもの、習慣だった。

「あれ？ 緑ちゃんがいねえな。どうしたんだ？」

俺  
緑ちゃん、というのは幽霊になって知り合った中年女性の幽霊だ。

と同じように、毎朝必ずこの駅に来る。そして学校へ行く息子を見送る

のが習慣なのだ。時刻は午前7時03分。いつもなら、緑ちゃんはとっ

くに来ていたはずだ。だが、今日はどうしたことかその姿が見えない。

「昇天したんかな」

頭の中をその事実が掠めた。

「ホント、いきなりなんだな」

専門用語では成仏だの、魂葬だのと言つらしいが、この辺りの幽霊の

間では「昇天」なんていう単語が流行っている。理由は簡単だ。成仏と

か、ダサイ。それだけだ。もしかしたら生前、パチンコやスロットが好

きだった幽霊が多いからかもしれないが、俺の中では成仏より昇天の方

がカッコいいからそう呼んでいるだけだ。

「あゝあ、緑ちゃんも昇天したんか。ヒマになったな」

昇天はある日「突然」訪れると言う。それこそ、何の前触れも無く。

幽霊とは言え、それなりに付き合いってものがあるから、昇天する際に

やはり世話になった幽霊に一言くらい挨拶に行きたいものだ。だが、

そんな世間の常識とは無頓着に、昇天はいきなり訪れるものらしい。俺

は今まで昇天している真つ最中の幽霊に出会ったことはないから何とも

言えないが、知り合いになったハゲ頭のオッサンや緑ちゃんから聞いた

話を総合すると、まるで氷を熱湯に放り込んだような感じで、スーっと

消えて行くらしい。

「想像すると、ちょっと怖えな」

自分の手を見る。生きている人間には見えないが、自分の目には、手

も、足も、体も、生きていた時と同じようにちゃんとあるのだ。それが

氷みたいにスーっと溶けると思うと、何だかゾツとする。

「ま、幽霊になった時点で昇天は確定してんだらうけど」

俺たちはもう死んでるんだから、この世に居場所なんてない。本  
当な

ら、死んだ直後くらいに昇天するものなんだ。でも、やっぱり誰も



がそ

んなに簡単に自分の人生を諦められるものじゃない。だから幽霊になる。

この世のどこにも俺たちが存在していい場所なんてないと分かっているけ

ど、それでも向こうへ行けない。いわゆる、心残りってヤツだ。

「あつ」

そんなことを思っていた時、駅のロータリー方面から歩いて来る  
1人

の女性の姿を見つけた。女性の名は夏海。俺が生きていた時の、彼女だ。

「いつもの時間通りだな」

俺が夏海と付き合い始めたころは高校に入学したばかりだった。  
今か

ら思えば、それなりに幼さも残っていたので、「女の子」という呼び方

が似合っていた気がする。でも、今の夏海は社会人らしくスーツを着て、

綺麗に化粧もしている。「女の子」と呼ぶより、むしろ「女性」と

言っ

た方がしっくり来る気がするんだ。俺は死んだ時のまま変わらないのに、

夏海はつい先月、高校を卒業して、社会人になってしまった。

「化粧品会社に就職したんだっけ」

慣れた手つきで改札を通り、颯爽と駅のホームを歩いて行く夏海の背

を追いかける。この時のポイントは、付かず離れずの微妙な距離をキ―

プすることだ。間違って夏海の背後に立てば俺は浮遊霊から背後霊にな

ってしまうし、肩に手を乗せようものなら憑依霊ひょういれいとか言っ恐ろしいモノ

になってしまう。浮遊霊であるうちは特に害はないが、背後霊や憑依霊

に昇格してしまうと、体調不良が続いたり、妙に運が悪いことが重なっ

たりと、夏海にとってかなりメーワクな代物になってしまう。俺は

幽霊

だが、いい幽霊だ。無害な幽霊だ。そこは重要である。

「夏海も、もう社会人か……」

取り  
今更としか言えないようなことを呟いてみる。何だか自分だけが

残されしまったようで、妙に空しくなった。当然と言えば、当然か  
もし

れない。俺は幽霊だから、変わりたくても変わらない。町には戦国  
時代

から幽霊をやっているというベテランもいるのだ。この先ずっと、  
俺の

見た目は18歳のままだろう。だが、夏海は生きている。生きてい  
るか

ら、ちゃんと成長する。成長してしまう。年下だったはずの夏海は、  
今

年で俺より年上になってしまう。

「オバサンになった夏海も、おもしれえかもな」

そんなことを言って、1人で笑った。駅の階段を登り、目的のホ  
ーム

へ歩く夏海の背を追いかける。人で溢れている朝の駅だが、不思議

と夏

海の姿を見失うことは今まで一度も無かった。

「もう一回くらい、話せばいいのにな」

最後に夏海と話したのは、俺が死んだその日だった。いつも通り、学

校が終わって一緒に帰って、この駅のホームで別れた。

「じゃあな」

それが、生きている俺が夏海に言った最後の言葉になった。考えてみ

れば、何だかマヌケだ。「じゃあな」って、それはそのまま別れる時の

言葉だ。今思えば、もっとマシな言葉を言っておけばよかったと、ちよ

っと思う。

「でも、何て言えば良かったのかな」

幽霊だから時間だけはたくさんある。今まで何度も同じことを考えて

来た。だが、コレと言った言葉が思いつかない。つくづく、俺は力

ツコ

いいセリフが言えないヤツだ。

「あ、電車が来た」

喧噪に満ちたホームに、電車の到着を知らせるけたたましい音が響き

渡る。この時間に来る電車に乗って、夏海は会社に行くのだ。ついでに、

俺が生きていたころ、ついでに夏海がまだ高校生だったころには、一緒に

に電車に乗って通学していた。この駅の、このホームの、この車両で。

「やっぱり夏海はここか」

夏海はずっと、同じ車両に乗る。そして、どんなに席が空いていても、

絶対に入口近くに立つ。そこは、俺たちが一緒にいたころの指定席だっ

た場所だ。ただ、昔は当たり前のように繋いでいた夏海の手は、今は味

気ない吊り輪を握っている。

「なあ、夏海」

背後に立つ分には問題があるが、正面に立つ分には問題ないと学んで

いる。俺はいつも通り夏海と一緒に電車に乗って、彼女の正面に立った。

無駄と知りつつも、声をかけてみたりする。幽霊の声は、生きている人

間には聞こえない。俺の勝手な独り言だ。

「夏海、会社どう？」

返って来る答えは無い。夏海はずっと足元に視線を落したまま、すぐ

傍にいる俺のを見てさえくれない。これも、いつものことだ。最初

のうちこそ、何とか声が届かないかと必死で叫んだものだったが、今で

はもう慣れた。

「やっぱり社会人になったら大変？ 高校生とは違う？」

疲れた顔をしていることが多くなったような気がする。やっぱり

いろ

いろ大変なんだろうと思う。だが、夏海は俺に何も言ってくれない。俺

にも、知る術はない。生きていたころには、あんなに何でも話してくれ

たのに。本当に、幽霊って無力だと思う。話を聞いてやることさえでき

ないんだから。

「まだ寒いよな。風邪とかひくなよ」

幽霊だから寒さは関係ない。夏だろうが冬だろうが、暑いとも寒いと

も感じることはない。周りにいる人たちが背中を丸めていたりするから、

そう思ったただけのことだ。

「早く夏になるといいよな」

夏思い出はいっぱいある。2人で海に行ったり、夜中まで駅のホー

ムで話したり、夏海と大人の真似事をしたのも、夏だった。夏休みはず

つと一緒に行った。思えば、俺が高校3年生で、夏海が高校1年生だった。

あの夏は、俺たちにとって最初で最後の夏になってしまったけれど。

「なあ、知ってる？ 前に2人で行ったケーキ屋があるじゃん。あそこ

で、新生活応援！ とか言ってケーキの安売りしてるんだって」

甘いものが苦手な俺は、夏海に引きずられるようにして入ったケーキ

屋でウンザリしていたけど、夏海は大好きなケーキをいっぱい食べられ

て幸せそうだった。今でも、ちゃんと覚えてる。

「でもさ、ケーキばかり食っていると太るゝとか言うんだよな」

だったら食べなきゃいいのに、と思うが、どういつワケか女の子とい

うものは、ケーキとかアイスとか、とにかく甘いものが無性に食べたく

なるらしい。それで、日曜日に電話して来てダイエットのためのラ  
ン二



ングに付き合っただけだ。その時は面倒だと思  
った

けど、今だったら分かる気がする。それは、俺に会うための口実だ  
った

んだらうなって。

「俺ら、金無かったしな。高校生だったし」

デートとか言っても、大人みたいに車があるわけじゃないし、映  
画と

か観るにしてもそれなりに金かかるし。俺らのデートって、本当に  
ただ

一緒にいて話すくらいだった。もちろん、どっちかの親がいない  
スキ

を見て部屋に呼んだり行ったりしてたけど。まあ、今となっては確  
かめ

る術は無い。全部、推測だ。でも、俺の顔を見るなり笑顔を見せて  
くれ

ていた夏海のことを思い出すと、そうなんじゃないかなって思った  
りす

る。

「ごめんな」

電車が停まった。ドアが開くと同時に、夏海は無言で電車を降りて行

く。その背を追いかけてながら、俺は今まで何度も呟いた言葉を、また口

にしてみた。

「ごめんな。一人にして……」

4月の空は、どこまでも重く曇っていた。雪でも降るんじゃないかと

思っていたら、本当に降り出した。街に、季節外れの雪が降る。

「夏海、寒くないか？」

駅を出て、すぐ傍にあるバス停へと向かう。夏海の会社まで、け

つこ  
う乗り継ぎが面倒だ。毎日毎日よく続くものだと思う。

「桜が咲いてるのに雪が降ってる。何か不思議だな」

バス停の横には桜並木が続いている。空から落ちて来る真っ白な  
結晶

に混じって、満開の桜の木から零れ落ちた薄桃色の花びらが、道を染め

て行く。俺は寒さを感じないから、純粹に綺麗だと思った。

「お前なら、何て言うんかな」

そう言えば、桜の花びらが一斉に舞う様子のことを、桜吹雪って呼ん

でいたような気がする。桜吹雪と、普通の吹雪じゃ、同じ「雪」でも寒

さが全然違う。

「寒い……だろうな」

バスを待つ夏海の肩に、雪が積もって行く。寒そうだと思った。生き

ていれば、夏海の肩に積もる雪を払ってやるのに。幽霊の俺の手は、夏

海に触れない。何も、できない。

「バス、早く来るといいな」

バスの中なら暖房が利いているはずだ。早く、こんな寒い場所から暖

かい場所へ行つて欲しい……。そう思った時、俺は自分の手が半透明に  
なっているのに気付いた。

「え……」

何が起きているのか、分からなかった。幽霊でも、自分の目には  
ちや

んと体があるように見えていたんだ。これまでは。こんな風に、自  
分の

手の向こうに景色が透けて見えるなんてこと、無かった。

「何、だよ……まさか……」

昇天、というジョークのような言葉が思い浮かんだ。知り合いに  
なっ

た幽霊のオッサンや、緑ちゃんは言っていた。昇天する時は、何の  
前触

れも無い、と。氷が湯に溶けるように、ただ消えて行く、と。

「マジ、かよ」

冗談じゃない。まだ昇天なんてしたくない。俺はまだ、夏海の傍  
にい

たい。まだ、消えてしまいたくない。

「止めてくれよ、マジで……！」

本気で願った。まだ俺を連れて行かないでくれ、と。祈るアテなんて

無かったけど、とにかく本気で願った。神様でも、仏様でも、何で  
もい

い。まだ、夏海の傍にいさせてくれと。

「おい！ 聞いてないのかよ！ 止めてくれって言ってんじゃねえ  
か！

俺はまだ、ここにいたいんだよ……！」

見上げた空は暗く、重く、ただ静かに雪が降っている。求める姿  
はど

こにもなく、ただ静かに透明になっていく俺がいた。

「……夏海」

夏海に向かって伸ばそうとした手が見えなかった。腕も、足も……。

俺は確かにここにいるのに、夏海にも、俺自身にも見えなくなっ  
てい

うとしてる。

「……俺、なんかもう時間みたいだ」

幽霊になった時から覚悟はしていた。俺たちはもう、別のものなんだ

って。ただ、俺が夏海を忘れられなくて、未練がましくこの世にしがみ

付いていただけだ。俺は死んだ。夏海は生きている。生きている夏海の

時間は続いて行く。でも、俺の時間はもうとっくに止まってしまっ

た。俺が死んだ、あの日から。

「くそ……！」

生きている夏海と、死んでしまった俺は、もう同じ場所にはいられな

い。酒を飲んで車を運転していたどっかのバカのせいで、俺たちの道は

永遠に分かれてしまった。

「何か、何か……言いてえよ、お前に」

今度は「じゃあな」「じゃなくて、もっとカッコいいこと。夏海に聞こ

えないことは分かってるけど、今度こそ、ちゃんとっておきたかった。

「何だろう。何がいいかな……」

時間が無い。早くしないと、俺が消えてしまう。

「幸せになれよ」とか？

違う。何か違う。そんなの俺らしくないし、ありきたりだ。

「頑張れよ」？

それも違う。夏海は、俺が頑張れなんて言わなくても頑張れるヤツだ。

今更そんなこと言っても意味が無い気がする。

「愛してるよ」？

そんな恥ずかしいセリフ言えるワケない。

「向こうで待ってるぜ」？

いや、それだと夏海が早く俺のところに来るのを待ってるみたいだ。

それはダメだ。夏海には長生きして欲しい。

「……………」

何を言えばいいのか、本当に分からなかった。もう一度、俺は夏海を

見つめる。肩に積もった雪が、さっきよりも多くなっていた。

「寒そうだな……………」

本当に、寒そうだ。

「同じ雪でも、桜吹雪みたいな暖かい雪に、なればいいのに……………」  
もしそうなれたら、空から降って来て、夏海が寒いとか寂しいとか思

う時、暖めてやれるのに……………。

「ありがとう、な」

ふいに口をついて、そんな言葉が出て来た。

「本当に、ありがとう、夏海」



一緒にいてくれたこと。

たくさん笑ってくれたこと。

俺を好きだと言ってくれたこと。

楽しかった時間をくれたこと。

俺の死を乗り越えてくれたこと。

何もかもに、ありがとうって言いたい。

バスが来た。

“ありがとう、夏海”

それが、俺がこの世に残した最後の言葉になった……。

(後書き)

お疲れ様でした。ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6536k/>

---

暖かな雪に……。

2010年10月14日14時43分発行